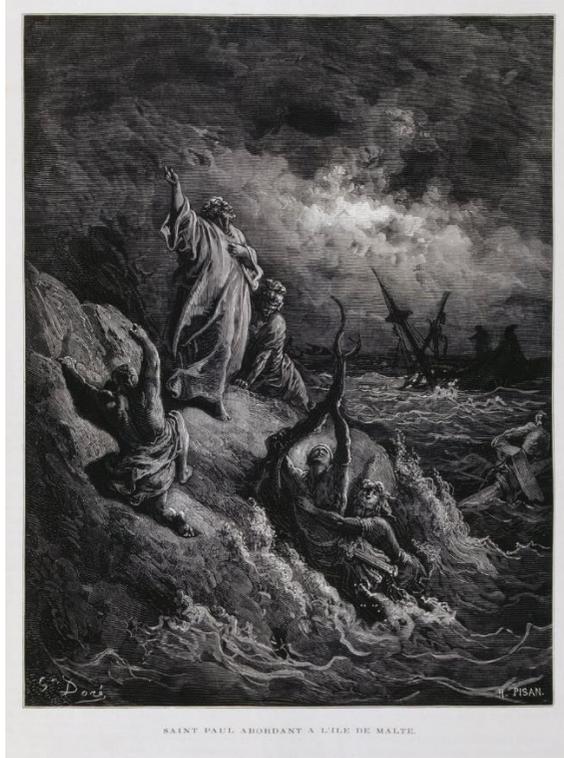


2024年9月29日 説教「まむしからも守られ」

使徒の働き 28章1～10節

船は座礁しました。船首も船尾も損傷を受けました。パウロを含む囚人達を殺すという兵士たちの案を百人隊長は退けました。そして、泳げる者は泳ぎ、他の者たちは板切れなどにつかまり陸に向かいました。そして、276人全員が助かったのです。



SAINT PAUL ABORDANT A L'ILE DE MALTE.

### 1. まむしがはい出して来て (1～3節)

①マルタと呼ばれる島 (1)「こうして救われてから、私たちは、ここがマルタと呼ばれる島であることを知った。」

船に乗っていた人々がたどり着いたのは、マルタと呼ばれる島でした。船員たちはマルタ島を知っていましたが、よくわからなかったのは、普通入港する所ではなかったからです。

②火をたいて (2)「島の人々は私たちに非常に親切にしてくれた。おりから雨が降り出して寒かったので、彼らは火をたいて私たちをみなもてなしてくれた。」

その島の人々は非常に好意的でした。ただでさえ、人々は海に入らず濡れだだところ、雨が降ってきました。寒かったことでしょう。そこに現地の人々が火をたいてくれ、体が温められました。これほどのもてなしはなかったことでしょう。ルカも恩恵を受けた一人でした。

③一匹のまむしが (3)「パウロがひとかかえの柴をたばねて火にくべると、熱気のために、一匹のまむしがはい出して来て、彼の手に取りついた。」

しかし、たき木はすぐに燃え尽きてしまいます。パウロはひとかかえの柴をたばねて、火にくべました。すると、その中にいたのか一匹のまむしが出て来ました。そして、パウロに向かってきました。新改訳では「彼の手に取りついた」とありますが、口語訳では「かみついた」とあります。

### 2. 島の人々の予想に反して (4～6節)

①島の人々の感想 (4)「島の人々は、この生き物がパウロの手から下がっているのを見て、『この人はきっと人殺しだ。海からはのがれたが、正義の女神はこの人を生かしてはおかないのだ』と互いに話しあった。」

島の人々は、まむしがパウロの手からぶら下がっているのを見て、これは助からないと思ったようです。「この人は人殺しだ」とさえ言い、「海からは救出されたが、正義の女神は彼を生かしておかないだろう」と話し合っていました。

②何の害も受けず (5)「しかし、パウロは、その生き物を火の中に振り落として、何の害も受けなかった。」

そんななかで、パウロはあわてませんでした。まむしを火の中に振り落とす力があり、パウロは何の害も受けませんでした。

③島の人々の驚き (6)「島の人々は、彼が今にも、はれ上がって来るか、または、倒れて急死するだろうと待っていた。しかしいくら待っても、彼に少しも変わった様子が見えないので、彼らは考えを変えて、『この人は神様だ』と言いだした。」

しかし、島の人々はパウロの身体に変調が起きることを予想していました。体がはれあがり、気分が悪くなり、ついには死んでしまうだろうと思いました。ところがいつまでたっても、様子は変わりません。どうやらまむしの毒が身体に回っていないのを見て、逆に島の人々は「この人は神様だ」とあがめはじめたことでした。

### 3. 島の人々への癒しの働き (7~10 節)

①首長の招待 (7)「さて、その場所の近くに、島の首長でポプリオという人の領地があった。彼はそこに私たちを招待して、三日間手厚くもてなしてくれた。」

ここではもう一つの出来事が紹介されています。パウロたちが漂着した地点から遠くない所に所有地を持っており人でした。ポプリオという人で首長でした。彼は一行を招待し、三日間手厚くもてなしてくれました。ポプリオの所に招かれたのがどれほどの数の人々であるかについてはよくわかりません。

②ポプリオの父の病 (8)「たまたまポプリオの父が、熱病と下痢と床に着いていた。そこで、パウロは、その人のもとに行き、祈ってから、彼の上に手を置いて直してやった。」

そのときに、首長ポプリオのお父さんが病気であることがわかりました。それなりに高齢であつたでしょう。胃の熱病とひどい下痢症状があり床についていました。パウロはそれを知り、彼の所に行き、祈りをささげ、その人の上に手をおきました。すると、病人はいやされました。

③島の人々からの信頼 (9~10)「このことがあってから、島のほかの病人たちも来て、直してもらった。それで彼らは、私たちが非常に尊敬し、私たちが出帆するときには、私たちに必要な品々を用意してくれた。」

この出来事は島の人々に驚きと感激を与えました。そして、他の病人だ人もやってきて、パウロを通してなされるいやしの業により、いやされました。キリストの御名によつての、いやしの業であつたことは言うまでもありません。ルカは医者でしたから、信仰を持つ医者として働きをしたことでしょう。島の人々は、非常にパウロ、ルカを含む「私たち」に敬意を表しました。そして、いよいよ彼らがそこから別の船で、出帆することになったときには、必要な品々を用意してくれたということです。なんという、恵みであつたことでしょう。

《結論》 マルコの福音書の末尾には、復活の主による全世界への宣教命令に続いて、信じる人々に対する恵みとして次のようなことが述べられています。「信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、蛇をもつかみ、たとい毒を飲んでも決して害を受けず、また病人に手をおけば病人はいやされます」(16:17~18)。

ここに「蛇をもつかみ、たとい毒を飲んでも決して害を受けず」とありますが、この約束はパウロにおいて実現しているといつて良いでしょう。実際のところ、パウロは船に乗員した全員とともに、難破を経て、ようやく上陸できました。しかし間もなく、まむしにかまれました。島の人々が思ったように、毒が回り、死ぬ可能性がある事態に陥っていたのです。もし命を落とせば、「勇気を出さない。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかししなければならぬ」(23:11)という、お約束は宙に浮いてしまいます。マルコの福音書末尾の御言葉もあるし、ローマでもあかしするというお約束も実現しないとすれば、神への信頼は薄らいでしまうかもしれません。

でも、主は真実な方です。まむしにかまれるという試練においても、神はそれを乗り越えさせてくださり、生命を守ってくださいました。何がどう働いたかは、人間的にはわかりません。医者ルカも医学的なことは述べていません。主の恵みによるいやしの御業がなされたのです。ここに、主イエスのマルコの福音書と使徒 23 章のお約束は果たされたのです。

今朝の聖書記事には後半にポプリオの父のいやしの記事があります。福音書にあるイエス・キリストによる癒しは、神である主の御業ですが、パウロは使徒であっても普通の人間です。まむしの出来事と同じように、神は信じる者、使徒パウロに、特別に働かれて御業をなしてくださったのです。

もっとも、私たちもパウロと同じ人間で、主を信じている者たちですが、このような出来事は頻繁に備えられるわけではありません。万が一、まむしに噛まれるようなことがあつたとすれば、まずは祈ったうえで、応急措置をしてすぐにも病院にいくでしょう。病気になれば、癒されるように祈ったうえで、病院に行つて医師の手にその病気を委ねることでありましょう。

しかし、病気について医療機関に任せきりであれば、クリスチャンとナンククリスチャンとはどこに違いがあるのでしょうか。私たちは医療機関にかかつたとしても、祈りの価値というものを忘れてはなりません。医師の手を主が用いてくださるよう、祈りつつ、そこに主が働いてくださつてこそ、病気は癒されていくと信じていきたいのです。

12年前の大腸癌の時も、去年からの抗原病についても、祈りの価値というものを強く感じました。その経過の一つ一つが不思議に主に導かれていました。少しでも、時などがずれていれば、命を落としていたかもしれません。自らの祈りばかりでなく、多くの方々の祈りを感じていました。それを主が用いてくださったと信じています。私たちはこの体を用いて生きる者達ですが、この生命の管理者は主です。主を信じ、どんな時にも、祈りつつ歩いていこうではありませんか。